アーティストインタビュー
なかじょうのぶさん

―最初に、出身地と子ども時代の思い出に残っているお話なんかを伺えれば。

なかじょう：出身地は、宮城県栗原市築館。今住んでいる家が築 70 年ぐらいなんだけど、そこで生まれて、今現在その家に住んでるっていう状況です。

―お子さんの時は、そのぐらいの栗原市っていうと、どうだったんでしょう、どのぐらいの人口というか。

なかじょう：今は、10 か町村が合併して 10 何年ぐらいなるのかな。それで、合併したあたりは 8 万人ぐらいで 10 万人都市めざすって言ってたんだけど、結果的には人が減ってるね。今 6 万 5,000 ぐらいだから（笑）。

―じゃあ、お子さんの時代の時のほうがたくさん人がいてっていう。

なかじょう：そうですね。

―小学校時代とか、演劇につながるとか、なんかそういう思い出に残っていることとか、学生時代とか何かありますか。

なかじょう：演劇につながるものってのは。結果的に今書いている時に、台本を書いているときに、ちっちゃい頃の思っただろうってことを拾ってはいるけど、現実にちっちゃいときに何らかで演劇との関係性っていうと、本当に無に等しいよね。

―そうすると、演劇を最初に始められたのが、大学の時。

なかじょう：そうですね。

―その時は何かきっかけとか？

なかじょう：本当はね、詩人になりたかったんですよ。で、詩人になりたくて、昔、『月刊平凡』とか『月刊明星』ってのあって。あなたも、浅田美代子の詩を書いてみませんか？　とかって、そういうコーナーがあって、そういうのに中学、高校時代、投稿してたんですよ。そしたら、詩人ってのはそういう作詞じゃなくて、詩人ってのは金子光晴とかそういうのを言うっていうその知識もなくて。ただ詩人になりたいっていう、文字が好きで、詩人になりたかった。で、結果的に、ああ無理だなと思って、じゃあ小説家になろうと思ったら、情景を書けない。街の景色を言葉に、漢字にするっていうのが、文字にするってのができないってのにそこで気づいて。じゃあ何かないかなと思ったら、たまたま観た、演劇みたいな感じで、話してることを文字にするのが演劇なんだなっていうのに気づいて、「ああ、じゃあ話してることを文字にするんだったら俺でもできる」っていうんで、演劇のほうをかじっちゃったっていうのはありますね。はい。

―じゃあ、文章好きというか、そういうところから。

なかじょう：そうですね。そういうところから、話し言葉を文字にして、それを立体化していくっていう演劇のほうが、自分の能力とスタイル的にフィットするんじゃないかなと思って、演劇のほうに近寄っていったっていうのがありますよね。

―一番最初に演劇を始めた時っていうのは、脚本っていうのが一番強かった？俳優だったり演出家っていうよりかは、脚本っていう。

なかじょう：そうですね。脚本。全ての作品、自分も出てるんだけど、やっぱり台本を執筆するっていうことがありきですね。

―ちなみに、学生の頃、中学、高校の頃っていうのは小説とか、そういう詩とかっていうのも結構お読みになられて？

なかじょう：あのね、俺、割と自分の中で悶々と考えてるタイプなんですよ。ただ、ある時、同窓会で、「のぶちゃんって、本当に窓から外見てぼーっとしてる

子だね」って同級生に言われて、俺は思考回路を目一杯回転させてるつもりなんだけど、周りから、ただぼーっとしてる少年に見られてたんだって。そこで初めて気づきましたね。

―大学の時から演劇をスタートされて、一番最初に所属されたのが、大学の。

なかじょう：そうですね、サークル的な劇団ですね。

―そちらから、次にそこをお辞めになって、次のところにっていう経緯というか。

なかじょう：だいたい大学時代は 1974 年から 2 、3 年なんだけど、その時代っていうのはやっぱり、状況劇場であり、唐さんであり黒テントであり、そういうのを常に観れる状況だったっていうのはありますよね。やっぱりそこの中で、あ、やっぱり自分の劇団、自分の意思と自分の意見とか自分の考えとかを完全に100%入れるには、自分で劇団っていうか、集団を持ったほうが一番早いんじゃないかみたいなことはありましたね。

―これまで演劇活動ずっと続けてこられて、なんか人生のターニングポイントになったところはありますか。

なかじょう：人生のターニングポイントってことはないんだけど、東京から 36、37 の時に栗原のほうに帰ってきて、で、「あ、芝居やってんだってね」みたいな感じで。それからあとに劇団作るんだけど、独人芝居の会って。その時に、ああ、地方で何か文化活動するには全国区の賞をもらってないと、まずは肩書きの説明ができない。ってのをすごく感じて。じゃあっつんで、じゃあ賞をもらわなきゃなと思って。その時まで賞を狙うとか有名になるとかって一切考えてこなかったけれども、やっぱり田舎のほうでやるんだったら何かのバックアップの文字がないといけないんだと思って、初めて劇作家協会の新人戯曲賞っていうのに投稿しましたよね。たまたま 1 回の投稿で新人賞もらったからよかったんだけど。

―戦略的かつ、すごく、1 回でもう賞取れちゃうっていうのが、すごいですね。

なかじょう：それで、すけべだから、ああ賞をもらえるぐらいの戯曲なんだと思って、今度、次の年かその次の年に近松門左衛門賞っていうのがあるんですよ、関西に。あれに応募して、そしたら一次審査、二次審査通っちゃって。あれ、これもらっちゃったら関西まで授賞式行かなきゃつんで、慌てて JAL の会員になって、飛行機安くなるようにって、慌てて会員なって、そしたら最終候補で終わっちゃったけどね。(笑)。

―すごいですね。それで、賞を受賞されて、その前にやはり何か取らなきゃっていうきっかけがあって、で賞を取られて、何か変化ってありました？

なかじょう：やっぱり、町の広報みたいなのに、町内で演劇活動しているなかじょうさんが受賞しましたみたいなのが、町の広報の 1 ページかなんかに載せてくれたんだよね。また楽になったっていうか、認知してくれたっていうのはありますね。やっぱり大きいよね。こんなに賞とかって、いらないってほどじゃないけど、くれるんだったらもらうけどみたいだったんだけど。やっぱりふつうの人に認知してもらうには、やっぱりこういうのは必要なんだなっていうのは、本当、転機じゃないけれども、転換期じゃないけど、それは意識しましたね。だから、商業的な面かな。完全にアングラでなんでもいいやみたいな感じじゃなくて、商業的に認知してうところは認知してもらったほうが楽なんだなみたいな。

―それは、東京時代に作りたいものを作っていこうと、自分の中にあるものを出していこうっていうところとは結構。これまず賞を取ってやっていかないとなっていう計画性というか、違うところにやっぱり、転機というだけあったのかなっていう感じがしますね。

なかじょう：ありますね。やっぱり、賞を取れるように書くっつのは必要なんだなみたいな。

―全然、全然というわけではないんでしょうけど、今までの自分が書きたいものを書くというのと、これに投稿するってなった時はなんか違う書き方をしてと

いうか。

なかじょう：そうだね。

―意識してるというか。

なかじょう：偏屈で突っ走んないで、ちゃんと理論があって、どんでん返しの伏線はここでみたいな感じの、設計図きっちり書かないとだめだよね。常に書いてるのは、設計図途中まで書いて、あと勢いでできんだみたいなのとか。あと、割と俺、ラストだけ作って、それで書き始める。このラストに行くにはどうすればって逆算できちゃって、じゃあこっからスタートでいいんだみたいなやるんだけども、きっちりやっぱり、皆さんに分かりやすいって言ったら、やっぱり設計図自身で立定的にも見えるねっていうのを作んないと、ってのはありますね。

大河原：なるほど。のぶさん、夢ありますか？

なかじょう：夢？

大河原：先ほど、身体の一部ってありっておっしゃってたけど、何かまだ達成してないこととか、続ける、惰性でもないと思ってるんですよね。エネルギーがどんどんと、年を追うごとにエネルギーが必要になってくるじゃないですか。セリフを覚えることに対しても。

なかじょう：うん、そうだね。

大河原：だから、こうありたい、こうなりたいなとか、なんか夢ってあります？

なかじょう：少しはやったりしてんだけど、芝居自体で生音。ギターなんかは入れたり、ジャズっぽいような、フリーでやってる人と一緒に生でやったりしてるんだけど、やっぱり生音で演奏者４、５人いて、生音で芝居やりたいっていうのはありますね。

大河原：すぐできるじゃないですか、それ（笑）。

なかじょう：そう？

大河原：すぐできますよ。

なかじょう：なかなかさ。こういう音みたいな感じで、こういう音もいいんだけど、とにかく台本中心なんだから、台本読み込んで音出せよみたいなさ。ので考えてると、なかなか難しいんだよ。楽曲は弾けるんだけど、芝居に合わせろって、合わせろって言っちゃあれだけど。

―芝居の中の音としてやってくれるっていう。

なかじょう：そうそうそうそう。

大河原：俳優が楽器を練習したほうが早いかもしれないですね。

なかじょう：そうすると太鼓とカスタネットとさ。

全員：(笑)。

―ギターとかでやられてた時っていうのは、結構そういう芝居に理解のある方というか。

なかじょう：そうだね。稽古場に遊びに来てずっと弾いてて、それでこっから入れてとかっていうのを、自分の中で組み立てて台本の中でやってる子と、何度か組んだことあるんだけど。

―そういった現場、私もちょっとだけ経験したことあるんですけど、やっぱり 4 人とか 5 人とか、オーケストラみたいになってくると、やりつつっていうのを全体で揃えながらっていうのは難しく感じます。

なかじょう：だよね。だから３人とか４人とかの生楽器でやれればなみたいな。単品だとはギターだけとかさ、ピアノだけとかっつんだとどうにかクリアできるんだけど。楽器の種類が４つぐらいでみたいな感じで、やれれば面白いかなっていうのはありますね。

大河原：あと、今作品、台本があるんだからって発言から、やっぱり劇作家であり、のぶさんの中に宇宙というか箱庭というか、がきっちりと存在してるっていうのは話聞いててすごく思うんですけど。それは栗原で育って、中学、高校と詩人になりたいっていうきっかけもたぶんあったと思うんですけども。そういう活動は特に、部活動で演劇をやったとかではなく、だとしたら、スタート地点はどこにあったと思いますか？

なかじょう：スタート地点は、たぶん、小学校の時の乱読。たぶん、小学５、６年生の頃って、図書館で一番本借りてたの俺だと思う。どんな本でもだいたい２日で読んじゃって。だから、小学校５、６年生で、五木寛之と野坂昭如は、あの頃出たやつは全部読んでたのかな。だから本当に乱読。いや、本が好きは好きだったんだろうけども、とにかく活字中毒っぽいような感じで読んだのが、たぶん無限の下地になってるんじゃないかな。

大河原：そこに行き着くには、たぶん家庭環境だったりとか、友だちとの距離感だったのか分かんないけど。うちの妻も栗原出身で、とにかく本が好きな人で。そっちに傾倒していったもう１個前のステップって何だったんでしょうかね。

なかじょう：たぶんね、４つ違いの姉がいるんですよ、私。で、その姉が読んだ本を一番最初に、がきっかけで、活字中毒になったんだと思う。で、その本てのは、「読んでみない？」って言われたんじゃなくて、「読み終わった」って言ってぽんと置いたからそのまま読んじゃって。その本がたぶん大江健三郎だったんですよ。で、小学４年生か５年生頃に読んで、へー全然分かんないけど面白いっていうのがたぶん、活字中毒の入り口だったのかな。

大河原：やっぱり自分が俳優としても出演されるし演出としても活躍されてますけども、やっぱり劇作とか、演出にしても俳優にしても、のぶさんの中に広が

っている宇宙の中の住人を 1 人連れてくるぐらいの感覚なのかなって、今お話伺いながら思ったんですよね。いやあ、すごい興味深い話をたくさん聞けました。すいません、ありがとうございました。

―ありがとうございました。

なかじょう：どうもありがとうございました。